

エッセイ 台湾研究を始めるということ

研究は台湾経験からはじまった

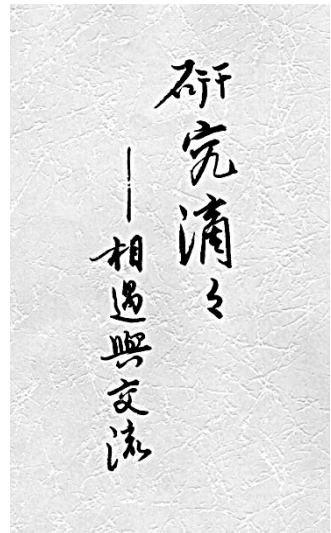
下村 作次郎

昨年(2019年)の1月に、自己の研究を振りかえって『研究滴々—相遇與交流—』を出した。急いで出したこともあって、誤記や誤植が多い。ただ、表紙の字は、尊敬する孫大川氏に書いていただいたことが自慢である。

これを見ると、最初に台湾文学について書いたものは、同人誌『啞啞』に発表した「(台北通信) ある詩人の感動から—台湾現代小説漫語」(第14号、1981年12月)である。この小論を書くことになったきっかけは、1980年8月から82年の8月にかけて2年間、中国文化大学に日本語教師として赴任し、台湾に住んだことにある。この間にまとめたものには他に、「臺静農小説序説—『地之子』の世界を中心として—」(『中日文化』、1982年7月)と「王詩琅自述『王詩琅回顧—文学的側面を中心として』」(『南方文化』9輯、同年11月)がある。ここでは、この三編の文章について振りかえり、台湾研究を始めたころのことについて書いてみる。

最初の「台北通信」は、はじめて接する台湾の文芸界をレポート風にしたものである。当時、台湾は戒嚴令下にあったが、重慶南路の書攤には、日本の中国関係書店では見なかった『現代文学』や『中外文学』、『新文芸』、『幼獅文芸』、『中華文芸』、『明道文芸』、『台湾文芸』などの文芸雑誌が並んでいた。その中から代表的な二誌『現代文学』(復刊第13期)と『台湾文芸』(革新号第17期)に掲載された作品について書いた。内容で覚えているのは、陳映真の「將軍族」と「夜行列車」、それに鍾肇政のタイヤル族を描いた「馬拉松 冠軍 一等賞」である。

私にとってこの時の台湾滞在は、その後の台湾文学研究の起点となった。滞在中に、多くの台湾人作家を訪ねた。鍾肇政先生を最初に訪ねたのは、当時台北にも支社があった民衆日報社の副刊編集部だった。その時に話題になった話でいまも記憶にあるのは、「客家人と閩南人は、共通の敵がいる時は仲良くするが、その敵がいなくなれば対立する」という意味のことをおっしゃったことだ。これがはじめて知った台湾の族群問題だった。また、先生は、日本語作家には日本語から中国語への言語転換の問題が存在したことを教えてくださった。最近、この言語転換の問題は、今日もなお存在し続けていることを知った。昨年(2019年)の12月、台湾文化センターで客家文学の新書発表会があり、その準備のために、黄恆秋著『台湾客家文学史概論』(愛華出版社、1998年)に書かれた鍾肇政先生の「序」を読んだ。そこに次のようなことが書かれていたのである。創作



はいつも日本語で考え、頭の中で「脳訳（訳脳）」して、北京語で書く。母語の「客家語」は、生活レベルの言葉として機能するだけで、創作の言語としては退化した、と。言語転換の問題を、改めて突き付けられた思いがした。

話をもどすと、鍾肇政先生は、吳濁流が1964年に創刊した『台湾文芸』の後を継ぎ、誌名を『革新 台湾文芸』（1977年）に変えて発行していた。『台湾文芸』の革新号はこの時に全期いただいた。

ここで文芸雑誌の蒐集について述べると、いまはもうなくなったが光華商場の古本屋街によく行った。その頃には、戦前に日本語で書かれた本はもうあまり見かけなくなっていたが、60年代以降の、『現代文学』や『台湾文芸』、『前衛』、『文学季刊』、『文学双月刊』、『文季』、『夏潮』などは、時間をかけてここで集めた。同時に、創刊・発禁を繰り返していた党外雑誌や海賊版の魯迅などの作品集なども極力買うように努めたが、それらは、先述した重慶南路や西門町の書攤で多く売られていた。こうして集めた雑誌は、『文学で読む台湾』（田畑書店、1994年）に収録した戦後の「台湾文学略年表」の作成に役立った。と言うより、これらの雑誌があっただけで年表が作成できたのである。

「王詩琅回顧」は、王詩琅先生が談話形式で話されたものを録音テープに採り、それを文字におこし、整理して、注をつけたものである。先生の汕頭街の自宅で、1982年1月に実施した。先生から個人講義を受けたようなもので、私の台湾新文学の知識の基礎となった。

当時、先生は病床にあった。私は書斎兼寢室のあまり広くない部屋で、先生が机の前の椅子に座って話すのを聴いた。テープに採った話そのものは、一日一時間ほどだったように思う。先生は何も見ず、ただ記憶だけで話された。時々、テープを止めて脱線することもあった。とくに何かの拍子に、特務は本当に怖いんだよ、とおっしゃったときの表情が忘れられない。戦後初期の頃のことも何度か話された。戦後は胡風一派がたくさん台湾に来てたんだよ。巴金も一度台湾に来たことがあるとも話された。こういう話は、当時は公表をはばかれた。ある時、先生は突然何を思ったか、おもむろに眼鏡をかけて覗き込むようにじっと私の顔を見られた。一瞬、私は先生の顔を見つめたが、先生は「この男はだいたいどうぶなのか」とふと感じられて、そういう行動をとられたのかもしれないと思った。またある時、いつも隣の部屋で友達と遊んでいたお孫さんが、私に紙切れを渡したことがあった。開けて見ると、「神経病！ 我很討厭日本人」と書いてあった。それに気づいた先生は、「子供だから、気にしないで」とおっしゃられたことをいまも覚えている。

もうひとつの「臺静農小説序説」は、中国文化大学の日本学科から原稿を求められ、それに応じて書いたものである。臺静農について書こうと思ったのは、遠景出版から1980年5月に出たばかりの『臺静農短篇小説選』を見つけたからだった。臺静農については、「莽原という小雑誌をめぐる」（『呷啞』10号、1978年6月）という小論を書いたことがあり、少し知識があった。臺静農はこの雑誌を出した未名社の同人で、魯迅が最も期待した学生のひとりだった。臺静農は二冊の小説集『地之子』（1928年）と『建塔者』（1930年）を未名社から出している。『臺静農短篇小説選』には、『地之子』収録作品を中心に15編が収められているが、『建塔者』所収の短編

小説は1編も収められていない。そこで論文執筆に際して、台湾では『地之子』だけを取りあげ、帰国後に革命青年を扱った『建塔者』を取りあげたのだった。こちらは、「台静農小説論(その2) —『建塔者』の世界—」と題して、『啞』17号(1984年5月)に発表した。

この間、当時中国文化大学におられた林慶勳先生に案内していただき、臺静農先生を温州街の台湾大学教授宿舎に訪ねたことがある。先生には北京時代の魯迅とのことや、戦後どんな関係で來台されたのかなど、初めての訪問にも関わらず、ずけずけと尋ねたように思う。先生は終始厳しい顔をされていた。先生は、北京大学では研究所国学門に学ばれたが、そのことを尋ねたとき、「国学門」を「Guóxuémén」と最後の「門」を四声で発音された。先生は安徽省出身なので、そのような発音になるのかと思ったことを覚えている。また、來台については、台湾大学の戦後二代目の陸志鴻学長の関係だと答えられた。また、『地之子』と『建塔者』について、所蔵されておられるかどうか尋ねたところ、「沒有」と答えられたので、コピーを用意しましょうかと申し出たところ、即座に「不用」と答えられた。その時、身の回りに大変注意を払っているとの強い印象を受けた。

その後、私は同じ未名社同人で『魯迅与未名社』の著者の李霽野先生に手紙を書いたことがある。当時は、南開大学の教授だった。詳しい内容は忘れたが、李霽野先生は戦後初期に來台しており、その後、許寿裳が台湾大学の宿舎で殺害(1948年2月18日)されて以降、台湾を離れ大陸にもどったが、その辺の事情について尋ねたのだと思う。私の手元には一通の手紙が残っている。臺静農先生に触れた箇所を引用してみよう。

静農是我小学同班同学，生在同一小鎮；未名社是魯迅先生倡議成立的，成員章素園和章叢蕪也都是小學同班同學（省略）

静農同我离別已经三十多年了，通信也极不方便，从大札略知他的近況，十分欣感。您若再去台北，谈到同我通信，他也会很高兴。杜甫有这样的诗句：“人生不相见，动若参与商”。您能在参商传送点消息，也就是作一次航天旅行了，感谢之外，还应祝贺呢。

日付は、「一九八五年中秋佳節」となっている。

臺静農先生は1990年11月9日に亡くなったが、翌年11月に林文月編『臺静農先生紀念文集』(洪範書店)が出ている。ただし、戦後初期の文学状況、さらには50年代以降の台湾の現代文学をどのように見ていたのかについては、臺静農の声はほとんど伝わってこない。

こうして、私は台湾文学研究の道を歩みだしたが、なにもかもやり残したことばかりであることに、いま気づかされている。

(2019年4月13日夜記す)